

音吉MEG”オリジナル盤はハイエンドに克てるか！” VOL.13 2019/9/28

駄盤と思ったら凄え音の特集VOL.1です。

今月は厳選?の駄盤特集です。オリジナルでも1万以上は無し、イヤ殆ど5千以下、イヤ2,3千以下でゲット出来る盤達が殆どです。駄盤と申すも定義は無いです、(1)見向きもされず安い事 (2)マイナーなミュージシャンで語られる事の無い盤 (3)著名なミュージシャンでも注目されない内容が評価されない、ひっそり盤 (4)ジャケットデザインが何じゃ、とそそられない盤 (5)日本ではあまり好まれないオルガン、コンガ入り、ソウルジャズ (6)レーヴェルがマイナー (7)録音の悪い盤 等々でしょうか? (7)を除いて、こんな盤で音、内容良しを見つけると嬉しい、今月はそんな注目されない、買われない、聴かれない盤達の特集です。私はこの手の盤、好んで蒐集?しており、是非聴いて貰いたいと、VOL.1、そのうち又ヤル気であります。

1、COUNT EM 88 / AHMAD JAMAL TRIO <A>

ARGO 610



AHMAD JAMAL(p) ISRAEL CROSBY(b) WALTER PERKINS(ds)

1956

数あるアーゴのアーマッド・ジャマルの盤の最初の盤ですが、次のバット・ノット・フォー・ミーが名盤の誉高いけれどコチラの方が音凄え〜ナ、と思いました、内容も遜色ナシ、ただジャケットの白いピアノが如何にも安物って感じで、カクテル・ピアニスト感を出す、まあこの当時のジャマルはカクテル・ピアニストなんだけど、それで評価されないのでしょうか? イヤイヤ日本盤で出てないから、その後アーゴで膨大な録音あるから、語られないのでしょうか? この辺りを聴くと、単音使い、特に高音が特徴的、良く言われる間の取り方の長さは、どうもこの後の様です、運指のパワーが凄いな、その後どんどんピアノが上手くなってインパルス時代なんかは、逆に面白く無いそりゃ何十年もやってりゃ上手くなるわナア、それが良いかは難しい処であります。ベースはイスラエル・クロスビー、ドラム、ウォルター・パーキンスで後に名を成した若い3人の名盤と言いたいです。これを聴いてるとエヴァンス・トリオなんかのわざとらしい三位一体ではないあらほましいトリオに思えて仕方ないです。

レコード屋さんで見向きされないで安い値で売れ残ってる盤ですが、私はジャマルのベスト3には入りたい。スーパー・ヴィジョンはフィル・チェスさん、エンジニアはバーニー・クラッパ、デザイン、フォトはドン・ブロンズティンです。

2、JAZZ OLYMPUS SERIES / KENNY CLARKE <A>

PHILIPS B 76 413 R



A)1,3 B)1,2,4 ROGER GUERIN(tp) BILL BYERS(tb) ARMAND MIGIANI(bs)
MARTIAL SOLAL(p) JEAN WARLAND(b) KENNY CLARKE(ds)

A)2,4 B)2 BILLY BYERS(tb) ROBERT GUIGNATH(as) ARMAND MIGIANI(brs)
MARTIAL SOLAL(p) JEAN WARLAND(b) KENNY CLARKE(ds)

1956

ケニー・クラークが渡欧した最初の盤、右掲の12インチのドイツ盤10インチですが、どちらが先かはわからん、です。12インチのフランス盤に比べて、断然音良し、の盤、ジャズ・オリンパス・シリーズです。フランス盤はお国柄エスプリの効いた柔らかい音、一方、ドイツ盤は押し出しの強い硬い鋭い音です。12インチは12曲収録、その内、ルネ・ユルトルジュ、ピエール・シユロ入りのセッションを除いて、8曲と思われる。エリントンやモンク、タメロン、マイルス、マリガンの曲をアントレ・オデルのアレンジで聴かせる盤です。参加のミュージシャン、どうもハッキリしない、日本盤再発の星野秋男さんによると訂正されている、が1曲抜けていて大丈夫かなあ、とも思う、まあそれで、この盤のクレジットのままにしておきます。星野さん、ヨーロッパ盤の本を出してる方、四谷三丁目の茶会記の瀧口さんの会で一緒させて頂いて、毎月、第4土曜日、この会と重なっちゃってここ1年行っていない、瀧口さんは昔、六本木にあったウェーブの店長だった人、この会には7インチの足立さん、昔イントロの板橋さん、盟友の田中さん、諏訪さんが主なレギュラーのメンバー、昨年の忘年会(高田馬場アルパート、志保沢さんの店)以来、半年お会い出来てない。

3、MOVIN' IN / SPECS POWELL & CO. <A>

ROULETTE BIRDLAND SERIES
R-52004



SPECS POWELL(ds) LEON MERIAN(tp) SAHIB SHIHAB(as,brs) NAT PIERCE(p)
JIMMIE DAHL(tb) AARON SACHS(ts,cl) HANK JONES(p) JIMMY CLEVELAND(tb)
PRITCHARD CHEESEMEN(brs) RAY COPELAND(tp) GEORGE DORSEY(as,fl)
CLYDE LOMBARDI(b)

1957

スペックス・パウエルさん、殆ど名は知られてない、1922年N.Y.生まれ、2007年没、ビバップやハード・ビバップの初期の人、1943年CBSで最初に雇われた最初の黒人ミュージシャンとある、その前の黒人ミュージシャンはどのような位置付け? と言いたくなる、2007年没。リーダー・アルバムはこの盤と61年のストランドのピック・バンドの2枚のみ、サイドでは1944年、ジェス・ステシー、45年レッド・ノーボのコモドア2枚、ティ・ウィルソン=ストリーヴル、コロムビア=エロール・ガーナー、1957年ヴァープのティ・ウィルソン・トリオ&マリガン・クインテット、1968年アトランティックのシャーリー・スコット、1969年プレステージでギター・ソウル、1971年ブルーノートでリュウベン・ウィルソン、1972年バーナード・パーディ=フライング・ダッチマン、ジョー・トーマス=グループ・マーチャント、以上が全て、全く日の当たらない人であります。ジャケットもツアーのドラムを積んだトラックなんだろうが冴えない、駄盤と思ってしまいますよねえ。特筆すべきはアレンジがレイ・コープランド、演奏にも参加、スーパー・ヴィジョンはスペックス本人、エンジニア、ラリー・ヒラー、フォト、エメリッチ・ガラ。音はハーレムの匂いがプンプンする。

4、GONE WITH THE WIND / THE DAVE BRUBECK QUARTET <A>

COLUMBIA CL 1347



PAUL DESMOND(as) JOE MORELLO(ds) GENE WRIGHT(b) DAVE BRUBECK(p)

1959

最高のジョー・モレロのドラムを聴く盤、と申し上げたい。
デヴィ・ブルーベックさん知らない人はいないと思いますが、なかなかターン・テーブルには乗りにくい、沢～山在り過ぎて購入もしづらい、デズモント好きが辛うじて購入って感じでしょうか。それにしてもアメリカ人はブルーベック好きなんだなあ、ファンタジー、コロムビア、アトランティックと一体何枚あるのだろう？
更に、ブルーベックは1920年生まれで91歳で2012年に亡くなっているのだが、2010年代まで録音は続く、数えてみようかとも思ったが、大変そうなのでヤメた、倅に100枚は超えます。
彼の数ある人気盤、名盤から少し外れたこの盤、音にビックリ盤であります。特にジョー・モレロのドラムに瞠目です、こうなるとデズモント、引っ込め、(無茶言うな!)いらんって思ってしまう。ジョー・モレロの前任者ジョン・トッジの方が好み、と仰る方もいらっしゃると思いますが、多分聴き処が違うんでしょうネ。
さて、主役の？ ジョー・モレロさんは1928年マサチューセッツ生まれ、2011年ニュージャージーで没、82歳。
ブルーベックとは1957年～1993年までに亘って、レコード上では76年～88年にブランク有り。
彼がリーダーの盤は5～6枚と少ない、サイドは30枚程か、複数回付き合ってるのは、ゲリー・パートン、マリアン・マクパートランド(ブルーベック以外では彼女の盤が多い)、ギル・ム、サル・サルバドールです。

5、MEANS OF IDENTIFICATION / VALERY PONOMAREV

RESERVOIR RSR 101 STEREO



VALERY PONOMAREV(tp) RALPH MOORE(ts) HIDEKI TAKAO(p)

DENNIS IRWIN(b) KENNY WASHINGTON(ds) 1985

如何にも駄盤ヅラした盤、ところがコレが内容、録音共に良いのですヨ。
レコードとして新譜を出していた最後期の正統派録音のレサ'ホリ盤であります。録音は85年、発売は87年。でもエンジニアはヴァン・ゲルターです。ヴァレリー・ポノマレフさんはプレーキーのメッセンジャーズ'に1976年～80年在籍してた人、彼の前がビル・ハートマン、ウッディ・ショウ、彼の後がウinton・マルサリスなんて恵まれない処に入っちゃったって感じでしょうか。名の通りロシアの方で1943年モスクワ生まれ、現在76歳、数年前N.Y.のスマールズ'で遭遇しました。かなりエンターテインメントなひょうきんな親爺でした。ピアノも渡辺マリコさんって日本人、このレコード'でもピアノヒデキ・タケオとあり(知らんナア)、日本人のピアノが好きなのでしょうか？

6、VELVET SOUL / GENE AMMONS

PRESTIGE 7320



A) 1.2 GENE AMMONS(ts) FRANK WESS(ts) JOHNNY "HAMMOND" SMITH(org)

DOUG WATKINS(b) ARTHUR TAYLOR(ds)

A) 3 B) 1.3 GENE AMMONS(ts) MAL WALDRON(p) WENDEL MARSHALL(b)

ED THIGPEN(ds)

B)2 GENE AMMONS(ts) OLIVER NELSON(as) CLARK TERRY(tp)

HOBART DOTSON(tp) RED HOLLOWAY(ts) GEORGE BARROW(ts)

BOB ASHTON(bs) RICHARD WYANDS(p) WENDEL MARSHALL(b) BILL ENGLISH(ds)

1960&61&62

プレステージの後半には黒人女性をあしらったジャケットが続出する、ここにご登場のモデルさんなんかマシな方で、我々の感覚からすると、何で～って感じる、ジャズ・ミュージシャンは黒人の方が多いいし、米国は日本と違って当然黒人系多いからどうも感覚が違うんでしょうネ。と言う訳で当時の黒人モデルジャケットに接すると駄盤'に見えてしまう、処がどうしてって思います。7320番は黄色のレーヴェルから青に変わる境目ですがコノ盤は青トラIDENTしかないと、因みに7321番以降数枚黄色のレーヴェルの盤が有ります。ここで、オルガンのA面か、ピアノのB面か、迷いました。私、オルガンもいいなと感じはじめたのはここ5,6年なので、ここでは無難なマルとリチャード・ワイアズ'のB面にしておこう、と自重しておきました。

7、"GITANE" / CHARLIE HADEN & CHRISTIAN ESCOUDE <A>

ALL LIFE AL001 STEREO



CHARLIE HADEN(b) CHRISTIAN ESCOUDE(g) 1979

こりゃあ凄いベースの音録りです。

チャーリー・ヘイデンさん、普段、超低音のユルフン?ベースなのですが、こんな録音もあるのですね。

昔、友人の処で聴いて、びっくらこいて、探しに走った盤、ジャケットの顔は知ってたので、すぐにゲット。オール・ライフ、79年のフランス盤、最近はいらん見ないです。

それまで、ベース好きなのにベースとギターの盤、見向きもしなかった、それにチャーリー・ヘイデンなんか殆ど興味の対象外だったんだけど、コレに触発されて、ギターとベースのデュオ、気にする様になったんですが、5,60年代には見当たらない、70年代のチョットした流行りだったんでしょうか。

チャーリー・ヘイデンさんオーネット、ドン・チェリー、キース、リヴェーション・オーケストラ、ジュリ・アレン、ゴンサロ・ルバルカバ、エンリコ・ピエラヌティ、パット・メセニーとか私、苦手の処を歩いてて、苦手のベースだったんですが、見直しを迫られました。上記の中で一昨年亡くなったジュリ・アレンだけ最近見直してます、旦那はウォレス・ルーニー。クリスチャン・エクスターデさんはまだ存命、まだ72歳、私、この方、他に1枚も持っていないのですが、調べると結構たくさん出してるんですね。初期の数枚がLP、知ってるのがある、殆どはCD、見た事もないです。写真を見るとトブ'ロキターみたいなヤツ、それで鉄弦の音、ジプシー感あるジャング派でしょうか。

8、MISS GLORIA LYNNE <A>

EVEREST LPBR-5022



GLORIA LYNNE(vo) WILD BILL DAVIS(org) SAM TAYLOR(ts)
HARRY EDISON(tp) EDDIE COSTA(vib,p) JO JONES(ds)
MILT HINTON(b) or GEORGE DUVIVIER(b) or TOM BRYANT(b)
1958

グロリア・リンさん、中々手が出ないですよ、グロリアは1929年ハーレム生まれ、2013年ニュー・ジャージーのニューアークで没、83歳、両親はゴスペル・シンガー、15歳でアポロ・シアターに出演、アルバムは結構あります、エヴェレストとフォンタナで5、60年代だけでも12インチが25枚程です。
ここでビックリはエヴェレストの音、この会社の録音は58年～63年、ジャズは5002番～5226番、有名な盤はウッディ・ハーマン、ジョー・ジョーンズ、ジョン・ラホータ、そんな中でグロリア・リンは10枚超で群を抜いてる。
他のマイナー・レーヴェルの買取りでは、エソレック、ミュージック・クラフト、カウンターポイント等々です。
N.Y.で創設、後年カリフォルニアに移ってる。
この盤のバックはハリー・エディンソン、エディ・コスタ、ジョー・ジョーンズ等タレントが参加、中でもサム・ターラーが好ましい。
不思議なのはギターが入ってるのにジャケットにはクレジットない、ケニー・バレルとの交流の挿話が結構語られてるのに、です。プロデュースはレイモンド・スコット、レコーディングはピーロック・インスルメント、音はこのスタジオのせい、エンジニア、アーロン・ネイサンソン、デザイン、アレックス・ステインワイスとある。

9、SONNY MEETS HAWK <A>

RCA STEREO



SONNY ROLLINS(ts) COLEMAN HAWKINS(ts) PAUL BLEY(p)
BOB CRANSHAW(b) ROY McCURDY(ds)
replaced HENRY GRIMES(b)

1963
ソニー・ロリンズと言えば、エマーシー、プレステージ、リヴァーサイト、ブルーノート、コンテンポラリーの諸作が人気盤ですがその後1962年～64年、7枚のRCA録音があります、ジャズを同時代に聴いて来た、我々よりもう一世代上の方々には懐かしい盤達なのでしょうが、我々の様に後追いで聴いてる世代にはパスしてそれ以前に行ってしまう盤達です。
ジャケットもメジャーのせい、50年代のデザインとは一線を画すデザイン、どうしても後回しになる、その中でも何なのジャケットでターンテーブルには乗りづらい、かく言う私もホーキンスで聴き直してみた盤です。
処がどうして、凄い音でした、私が保有してたのはステレオ盤、モラルに買い替えようと思ってから早10年モラルは小1万しちやってるんで、ウェット思っしまい、未だ買い替え出来ず。
メジャーのRCAなんで、プロデュース、エンジニア、デザイン等表記なし、このデザインのシリーズは確か他に2枚ある。

10、TRY THIS ON FOR SIZE / BOB LEAPER BIG BAND <A>

PYE NSPL 18339 STEREO



THE SONGS OF JACKIE TRENT AND TONY HATCH
MO MILLER(frh) BARRY CASTLE(frh) JIM BUCK JNR.(frh) EDDIE BLAIR(flh)
BOBBY HAUGHEY(flh) KENNY SALMON(p) BOB EFFORD(ts) RONNIE SCOTT(ts)
TONY COE(ts) BOB BURNS(as) ALFIE REECE(tuba) SPIKE HEATLEY(b)
IKE ISAACS(g) RONNIE ROSS(brs) JACKIE ARMSTRONG(bass-tb) CLIFF HARDIE(tb)
WALLY SMITH(tb) JOHNNY MARSHALL(tb) KENNY CLARE(ds) KENNY WHEELER(t)
TONY FISHER(tp) LEON CALVERT(tp) GREG BOWEN(tp) JOHN HUCKRIDGE(tp)
1970

コレは知ってる人、そういないでしょう(自慢!)、このジャケット、ダメじゃないけどちゃんと、ジャズしてくれるのか多いに不安になる。トニー・リーパーさんなんて名も聞いた事なし、大丈夫かなあ、メンバーを見ると知らん人もた〜くさん、でも好きなクラーク・ボランのメンバーがチラホラ、恐々ゲット、思い切りました。
この盤、ジャケット違いもある、片や40年代風のビックバンド全体を写した窓枠デザインの一見、再発っぽいジャケット、内容は一緒、どっちがオリジナルかは判らんです、お値段は圧倒的にコチラ、7、8千と言った処か？片や2千位、ま、コチラの方が逆に70年代の時代性を感じる。
さて、来月10月26日(土)は”2018 N.Y.で聴いたミュージシャン達”で聴いたライブハウスの紹介とそこで聴いたミュージシャンのCDを聴く(当然レポートはないので)、特集です。
ダブルテーマで結構難解なレジュメになってしまいました、今年の分なんか、未だ手付かず、です。
だって、CDがこれまたライブ盤だったりして、聴いた処とCDのライブ録音の場所の両方の紹介だったり。
ついにて2020年”N.Y.ライブ三昧ツアー”の告知、2012年6月末、申し込み締切は2月末です。
ツアーと言ってもこっちとらビジネスでやっとなる訳では無いので、一緒に行きましょうって会です。



*このレジュメはご自由にお持ち帰りください、持って帰ってイイのかな、と感じてる方へ。ヘッいらねえよの方は置いていって構いません。

**この会のみ1オーダーでもOKの了解をマスターから貰いました、でも出来れば2オーダーを!

***<A>はA面、はB面。

TEXT&PHOTO/小倉正人